

<セミナー1> 先人たちはシェイクスピアをどう読んできたのか

コーディネーター: 佐々木 和貴 (秋田大学教授)

メンバー: 伊藤 優子 (学習院大学非常勤講師) / 伊澤 高志 (立正大学講師) /

岩田 美喜 (東北大学准教授) / 松田 幸子 (高崎健康福祉大学講師)

ゲスト: 原田 範行 (東京女子大学教授) / コメンテーター: 川地 美子 (杏林大学元教授)

シェイクスピアと対峙した近世の先人たちは、その作品を飽くことなく絶賛し、また時に厳しく批判し、さらには大胆に書き換えてきた。彼ら/彼女らの書き残した言葉の大半は、今では広く読まれているとは言い難い状況にあるが、しかし、それらは本当に、すでに乗り越えられた、あるいは古びて読むに値しないものなのだろうか。本セミナーは、没後400年という記念の年にあたって、あらためてこうした過去の遺産(批評および改作)を点検し、そこから新しい研究の視野を拓げていくことを狙いとして企画されたものである。

議論は、集まったメンバーの興味・関心が、王政復古期から19世紀初頭に渡るものだったため、結果的に「長い18世紀」におけるシェイクスピア受容、あるいは「シェイクスピアの近代」というテーマをめぐって展開することになった。また構成としては、前半はAグループ(松田、伊澤、伊藤)が「王政復古期のシェイクスピアの改作」について、後半はBグループ(原田、岩田、佐々木)が「18世紀後半のシェイクスピア受容」について発表し、それぞれのグループにコメンテーター(川地)がコメントするという形をとった。人数の関係もありメンバー相互で議論を深める時間的余裕はなかったが、Aグループでは、シェイクスピアのテキストが、王政復古期に「生の素材」から「権威の源泉」へと変容していくプロセスが浮かび上がってきた。またBグループでは、18世紀後半のシェイクスピア受容におけるテキストと上演、PageとStageの入り組んだ関係が、Samuel Johnsonという文学的巨人を共通の軸として考察された。各メンバーの要旨は、以下の通りである。

(1) 松田「シャドウエル『アテネのタイモン、人間嫌い』を読む —〈素材〉としてのシェイクスピア」

1678年の1月、公爵劇場で初演されたトマス・シャドウエルによる『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*)の改作『アテネのタイモン、あるいは人間嫌い』(*Timon of Athens, or the Man-Hater*)は、二人の女性キャラクターを登場させることによる恋愛要素の強調、また宴の場面での仮面劇の挿入等、王政復古期初期のシェイクスピアの改作のコンヴェ

ンションに則った構成になっている一方で、同時期のバッキンガム公についての政治的な読みを強烈にうながすという点において、1678年以後の、政治的議論の場としてのシェイクスピアのプロトタイプにもなっている。

(2) 伊澤 「シェイクスピアを模倣する—ドライデンの『すべて愛のため』と『トロイラスとクレシダ』における〈友情〉」

まずジョン・ドライデンの演劇論・シェイクスピア論に触れて、そのなかでも特にシェイクスピアの描く男同士の関係、とりわけ友情にドライデンが着目していることに注目する。それを踏まえて、『すべて愛のため』(*All for Love*)と『トロイラスとクレシダ』(*Troilus and Cressida*)をとりあげ、ドライデンが、シェイクスピアを「模倣」しながら男同士の友情を描くことで、例えばそれ以前の英雄劇などで描いてきた男性性とは異なる、あらたな男性性を模索しようとしたのではないかと論じる。

(3) 伊藤 「舞台と書齋からみる『リチャード3世』—シバー版改作劇を中心に」

コリー・シバーによる改作版『リチャード3世』は、王政復古期の終わりを含め、いわゆる「長い18世紀」にわたり国内外の劇作家や時の名優そして観客に広く受け入れられ、成功を収めた作品であった。シバーは、台詞の印刷表記を区分することによって台詞の選定の3段階、すなわちシェイクスピアに忠実な箇所、変更を加えた箇所、自身の創作箇所を明示している。シェイクスピアの上演作品の印刷された形態に親しむ人々が増え、「聞くもの」から「観るもの」さらに「読むもの」として変わりゆく演劇の受容が一気に拡大してゆくこの世紀の新しい傾向に、かなり早い段階で対応している作品といえる。

(4) 原田 「シェイクスピアの近代—テキスト、制度、想像力」

注釈作業を通じてシェイクスピア的想像力の世界が18世紀の人間社会にどこまであてはまるものなのかを模索していたジョンソンと、18世紀を通じて概ね確定したテキストに依拠しながら高らかにシェイクスピア「理解」を唱えるロマン派詩人とは対比的である。だがこうしたロマン派以降の基本的な姿勢は、実はジョンソンにその淵源を發していた、すなわち、ジョンソンが実作者としての立場を離れて感じたシェイクスピアとの距離感に端を發した受容者の想像力にかかわるものであった。ジョンソンがシェイクスピアに感じた「遠さ」に發するこの姿勢、シェイクスピアを「理解」しようとするこの姿勢を、シェイクスピア劇が経験することになった近代であると位置づけたい。

(5) 岩田『『ハムレット』をめぐるギャリックとジョンソン博士の奇妙な関係』

シェイクスピアをめぐるギャリックとジョンソンの態度を考察する際に、しばしば言われるのが、「この時代には、舞台と書物 (stage and page) の乖離ないし対立が決定的になった」ということだ。しかしこのような図式化は、ギャリックが 18 世紀のシェイクスピア受容において果たした、もっと複雑な役割を隠してしまうのではないか。ギャリックはむしろ新古典主義者たちの要求に、劇場のシェイクスピアを沿わせるべく、『ハムレット』改変に乗り出したのであって、彼の『ハムレット』は舞台と書物の乖離を端的に示す例であるどころか、両者をつなごうとした作品だったのである。

(6) 佐々木「Elizabeth Inchbald, *Remarks for The British Theatre* (1808) を読む」

『英国演劇集』につけられた remarks で、インチボールドは当時露わになりつつあった「書物」と「舞台」の乖離を、実作者兼元女優の視点から、今一度修復しようと試みている。精読か上演かではなく、Page も Stage も「シェイクスピアの作品」として捉えて、両者を自在に行き来しながら、作品解釈から俳優の演技まで、インチボールドが挙げる論点は、実に多岐にわたり、その目の付け所は、「古びて読むに値しない」どころか、今も刺激的だ。remarks に埋まっている「可能性の種」を見つけ出し、未来に繋げていくことで、シェイクスピア批評はさらに豊かになるのではないだろうか。

最後にコメンテーターの川地氏から、Page と Stage が乖離している昨今の状況に対する切実な問題提起がなされたところで、本セミナーは時間切れとなった。

コーディネーターとして、セミナー指針に「没後 400 年という区切りの年に、先人たちの「肩の上に乗って」、シェイクスピアという広大な森をより遠くまで見渡せれば幸い」であると記したが、セミナーを終えての率直な感想は、先人たちの「肩の上に乗る」ことで、かえってよく見えてきた、シェイクスピアという森の広大さだった。そして、もうひとつ実感できたことは、「先人たち」がそこに残してくれた道しるべは、今も頼りになるということである。シェイクスピアという森のさらにその先へ、さらにその奥へと進んでいくためには、「先人たちがシェイクスピアをどのように読んできたのか」、彼ら／彼女らとの対話が、今こそ、あらためて必要なのではないだろうか。

(文責：佐々木和貴)

